印教研図工・美術研究部テーマ

「造形教育はこれからも未来をつくる」
～身に付けさせたい力は何かを問う～

「アートプロジェクトの視点を取り入れて地域と共に成長する美術教育を実現する」
～アートプロジェクト八街ミュージアム～

「板倉履物店」2018笹引小

「総武住販」2019実住小

「秋山百貨店」2019八街東小

「あまさけや家具店」2019八街中央中

「あまさけや家具店」2018交進小

アート・プロジェクト　Art Project

作品そのものより制作のプロセスを重視したり、美術館やギャラリーから外に出て社会的な文脈でアートを捉えたり、アートを媒介に地域を活性化させようとする取り組みなどを指す。クリスト＆ジャンヌ=クロードによる、建物や橋、島を巨大な布で梱包する取り組みが有名。欧米から高い評価を得るベネッセアートサイト直島をはじめ、日本でも数多くのアート・プロジェクトが展開されているが、目的や活動内容は多様で、明確な定義があるわけではない。日本で「アート・プロジェクト」という言葉が使われ始めたのは 1980 年代前半で、川俣正や柳幸典がその先駆けだが、既存の展示スペース以外の場所で展示しようとする試みは、50 年代から野外美術展というかたちで行なわれていた。60 年代にかけて作家が自分たちで場所を探して展覧会を行なう動きが活発になり、この流れは 70-80 年代に続いていくが、それは美術館やギャラリーの枠に縛られない自由な制作がしたいという作家の興味や関心によるものだった。90 年代に入り、ワークショップやアーティスト・イン・レジデンスなど、制作過程を来場者に見せたり、地域住民を巻き込んで制作する方法が確立すると、教育普及活動に力を入れ始めた美術館の動向とも相まって、市民参加型の企画が重視されるようになった。近年では、作家が地域住民と協働することで地域振興を目指すようなプロジェクトも少なくない。

アートスケープ/artscape（大日本印刷株式会社運営の美術館・アート情報の Web マガジン）より

令和３年８月２５日（水）ヒルトン成田

八街市立八街中学校　玉造　明男

1　研究主題

「アートプロジェクトの視点を取り入れて地域と共に成長する美術教育を実現する」
～アートプロジェクト八街ミュージアム～

2　主題設定の理由

新学習指導要領において、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく。」(文部科学省 HP　2018/07/09　新学習指導要領について資料 4　これからの教育課程の理念)、「学校がその目的を達成するため，学校や地域の実態等に応じ，教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど，家庭や地域社会との連携及び協働を深めること。また，高齢者や異年齢の子供など，地域における世代を越えた交流の機会を設けること。」（中学校学習指導要領　第 1 章総則　第５の２のア）など、「社会」「地域」「連携」というワードは頻繁に登場する。学校教育と社会との関わりは、益々重要視されてきている。

地域とアートが連携したアートプロジェクトは、まさにこれからの学校教育が目指す方向に合致している。限られた授業時間の中だけで図工・美術科の学習を完結させるのではなく、身につけさせたい力のために、授業外・学校外の時間や場所を柔軟に連動させて、効果的な学習を行う必要があり、これにより図工・美術科は、学校内だけでは身につかない様々な力が身につく、学び多い教科となり、誰もが認める教育的価値の高い重要な教科となると考える。

これからの教育課程の理念

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質･能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携･協働によりその実現を図っていく。

＜社会に開かれた教育課程＞

① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質･能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的･物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有･連携しながら実現させること。

出典：文部科学省HP　2018/07/09　新学習指導要領について資料4

3　実態

（1）印旛地区の図工・美術

印旛地区では長年、地域連携（佐倉市の佐倉学、成田市成田山での写生会や参道学習、八街市の幼小中高連携教育）に取り組んできた。千葉県立美術館との連携（人事交流、学芸員体験、ワークショップ参加）、千葉大学との連携（授業研修会や研究会の講師依頼、長期研修）も盛んである。印旛郡市中学校美術部展【佐倉市立美術館×中学校美術部】（1997 年～）、八街ミュージアム【八街市内各所×小中学校】（2009 年～）、成田アート博覧会【成田山表参道仲之町商店街×小中学校】（2011 年～）、美術部実践交流会 in 千葉大学【千葉大学×中学校美術部】（2012 年～）など、人や作品が学校外で交流する活動が、次々に誕生し、継続している理由は、印旛が、学校の枠を超えた連携を当たり前に経験している先生が多い地区だからとも言える。

（2）八街の図工・美術

印旛地区の最も南に八街市はある。八街市は 20 年以上前より、小中連携を初めとした様々な連携「幼小中高連携教育」に力を入れてきた。これは学級、学年、学校という、閉ざされた集団で起こる諸問題を、子どもたちが地域や保護者など多くの他者と関わることで乗り越えた歴史があるからである。こうした市全体での取り組みにより、連携の必要性や重要性を実感した多くの先生方は、教科、行事、生徒会活動、歌声活動、キャリア教育など、様々な教育活動の中に連携を取り入れようと、貪欲に模索し続けている。2003 年、２年生の職場体験学習でお世話になった八街市南口商店街より、落書き防止のためのシャッター画制作の依頼を八街中央中学校美術部が受けたことから、八街市の図工・美術科と八街駅南口商店街との親密な関係はここから始まる。その後、2009 年、美術館のない八街市において街全体を大きな美術館に見立て、児童・生徒の作品を街に展示する地域型展覧会八街ミュージアムが始まる。

2003年12月　1枚目のシャッター画制作開始

2009年10月　第１回八街ミュージアム開催

（3）造形活動のつながりを研究する研究会【部会Ｄ】

千葉県教育研究会造形教育部会には６つの分科会が存在し、毎年、千葉県内の小中学校が、様々な視点で造形教育を見つめ、研究を行っている。そのひとつ【部会Ｄ「造形活動のつながり」】は、主に地域連携に関する様々な研究を行ってきた。それぞれの街で可能な地域連携を、教師の専門性や経験や蓄積された授業の引き出しや、それまでに築き上げてきた地域とのネットワークなどを駆使して形にしてきた多くの実践は、単なる地域連携を目指したものではなく、美術は「社会にどんな変化を及ぼすか」「社会にどう貢献できるか」「社会と繋がる、どんなツールになるうるか」「社会を豊かにし、街を豊かにし、自分の生活や人生を豊かにするか」を、真剣に考える指導者の熱い思いが土台にあったように感じる。この分科会の部長・副部長は長い間印旛地区の先生（主に八街市の先生）が務めている。地域連携は印旛地区の先生方が千葉県内の先生方と共に継続的に研究を重ねてた分野であると言える。

八街ミュージアムは、2009 年（第１回開催直後）から数年間、【部会Ｄ】をはじめとする、いくつかの研究会で発表を行ってきた。当時、研究会に参加していた大学の先生から「八街ミュージアムは、いいアートプロジェクトになり得る」と言っていただいが、この時点でアートプロジェクトの概念を理解している中学校美術教師は印旛には少なく、そこから長い間、この言葉の意味を理解できぬまま、八街ミュージアムを継続し続けてきた。

資料：P7～　Episode３ History①1997～2014学校のアート街に出る　参照

アートプロジェクト・八街ミュージアムの実践
～八街駅南口商店街との連携～

所属　八街市立八街中央中学校　杉谷 浩一
成田市立成田中学校　玉造 明男
印西市立印旛中学校　廣川 政和

そもそも、なぜ連携なのか？

昨今、少年とは思えない残虐な手口で人の命をいとも簡単に奪ってしまうなどの少年犯罪の多発。また成人式等に見られる傍若無人ぶりのふるまい、そして教育現場でのいじめ・不登校問題・授業の不成立・規範意識の欠如・心の荒廃などが社会に大きな影響を与えている。

幼小中高連携教育　全国公開（2004年）「今、なぜ幼小中高連携教育が必要なのか」より一部抜粋

様々な問題を抱える家庭・学校…

八街では、子どもたちを取り巻くすべての大人たちが様々な場面で手を組み、子どもたちを育てることの必要性を強く感じていた。

→　八街中央中学区では特に地域・家庭との連携を模索していた。

その頃八街駅南口商店街では…

かつては賑わっていた街が…

現在は人通りが減り、子どもたちの明るい姿が見られなくなった…。

美術部と地域との連携

2003年、商店街からの依頼を受け、落書きが絶えなかった商店街の壁に、八街中央中学校美術部の生徒が壁画を描き始めた。

壁画は2006年に完成し、現在も街を美しく飾っている。

その後も地域・学校は更なる連携を模索し続けていた

そこで…八街ミュージアムプロジェクトが始まる！

児童生徒の作品を街の商店街に展示し、鑑賞会を行うことで…

1　子ども→地域　子どもが地域と関わる（地域の活性化）

2　親＋子ども　親子で商店街へ出かけるきっかけをつくる

3　親→学校　親に学校へ関心を持ってもらう

4　学校＋地域→子ども
学校と地域が一緒に子どもを育てようとする

プロジェクトその1
授業の実践（小中連携）

「自分だけのかたち」をテラコッタ粘土でつくる中学生

様々な技法を使い、「自分だけの器」に挑戦する小学生

プロジェクトその2
八街ミュージアムの実践（地域との連携）

「八街ミュージアム」の概要

時期：　2009年10月3日～11月8日
（2010年は10月9日開催）

場所：　八街駅南口商店街２６店舗

対象：　小３及び中１の児童生徒作品
（テラコッタ粘土による造形）

方法：　スタンプラリー形式の鑑賞
（お店の人との会話が生まれる）

「地域の活性化に繋がる」といったご意見もいただきました。

友達同士や親子で作品を観に来る光景が見られました。

今回のプロジェクトの特徴

学校と地域という両者の思いが同時に高まり、このプロジェクトが成功した

第49回大学美術教育学会東京大会でおこなったポスター展示（武蔵野美術大学2010年9月18・19日）
杉谷浩一（八街市立八街中央中学校）/玉造明男（成田市立成田中学校）/廣川政和（印西市立印旛中学校）

4　研究仮説について

【仮説１】

・作品展示が中心の八街ミュージアムにアートプロジェクトの視点を取り入れることで、美術教育と街の双方に利のある地域連携が実現するだろう。

〈研究の流れ〉
①人との対話　・商店街の方々・街の方々・アートプロジェクト経験者(印旛の先生)
②アートプロジェクトを理解する・アーカイブセンター「アーツカウンシル東京 ROOM302」(東京都)
・書籍「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990 年→ 2012 年」
・Web「Wikipedia」・Web マガジン「アートスケープ/artscape」
③アートプロジェクトを体感する・「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ 2018」(新潟県)
④八街ミュージアムを見直す

【仮説２】

・美術教育を学校内に閉じず、授業にアートプロジェクトの視点を取り入れることで、《表現（制作)》《発表（展示)》《鑑賞》が学校を含む街全体で循環する、より質の高い学びが実現できるだろう。

〈実践〉
①《発表》を前提として作品を制作する　・八街市立八街東小学校４年「未来のピーちゃんナッちゃん」
②《表現》《発表》《鑑賞》を連動させる　・八街市立八街中学校１～３年「八街駅展プロジェクト」
③八街ミュージアムを使った鑑賞授業　・八街市立八街中学校２年「八街ミュージアム展の鑑賞」

5　研究内容【仮説１**「作品展示が中心の八街ミュージアムにアートプロジェクトの視点を取り入れることで、美術教育と街の双方に利のある地域連携が実現するだろう。」**について】

（１）研究の流れ

①　人との対話

2018 年２月、八街駅南口商店街より新たなシャッター画制作の依頼を受け、八街中学校美術部による「第２期シャッター画制作」がスタートする。学校（教師と生徒）が、毎週（土曜日の９：００～１２：００）商店街に足を運ぶことで、商店街の方々との対話が日常化する。人通りの多い表通りのシャッター画制作のため、街の方々との会話がさらに増えた。シャッター画制作に至る経緯を聞かれることや、中学校の授業の様子を聞かれることもあり、美術教育の目的を街の人に伝える機会にもなった。今回、かつて、その場所にあったお店のイメージで絵を描いていることもあり、過去の思い出を語ってくれる方、昔の写真を見せてくれる方もいた。さらに会話の中で、商店街の現状と課題、八街ミュージアムの現状と課題、アートが街と関わる新たなアイデアなど、自然な形で情報収集や意見交換もできた。シャッター画制作は単に絵を描くことではなく、学校と街の方々との重要な交流の場であり、地域と学校の連携を推進する重要な活動であると気付かされた。

2018 年８月、佐倉市立美術館で教職員展（美術部展と同時開催）が開催された。教職員展は、作家としての顔を持つ先生方が集まり、互いの作品を通じて、世代を超えて知り合う機会となる。大学での専門分野や、現在の作家活動、参加団体や展覧会の情報などを知る機会にもなる。ここで新潟県の大学でアートプロジェクトを専攻していた先生と知り合いになり、アートプロジェクトに関する様々な話を聞くことができた。八街ミュージアムの課題や、今後の構想について伝え、アドバイスをもらうこともできた。大学の授業の中でおこなったという、古民家を街の不要品を使ってギャラリーに改装し、近隣の喫茶店と提携してアートカフェを運営した話は、よいヒントになった。

② アートプロジェクトを理解する

アートプロジェクトを理解するために、千葉大学の先生からいただいた「千葉アートネットワーク・プロジェクト（WiCAN）」に関する書籍や、Web 上の資料（HP、Blog、Web マガジン、報告書、論文）を読むことから始めた。「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990 年→ 2012 年（アーツカウンシル東京）」は、アートプロジェクトが街に受け入れられるまでの失敗と反省の歴史が詳細に記録されており、様々なヒントを得ることができた。アートプロジェクト等のアーカイブ資料を公開している「アーツカウンシル東京 ROOM302（東京都千代田区「アーツ千代田 3331」３階）」を訪れ、全国各地で開催されたアートプロジェクトの資料（冊子、スタンプラリー等）を閲覧した。

③ アートプロジェクトを体感する

３年に一度開催されている世界最大規模の国際芸術祭「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ 2018」が開催されていたため、2018 年８月、夏期休業を利用して新潟県に向かった。３日間滞在し、街全体を使ったアートプロジェクトを体感しながら、２ヶ月後に迫った第 10 回八街ミュージアムに向けたヒントを探した。

④ 八街ミュージアムを見直す

第 10 回八街ミュージアムに向けて、市内小中学校 12 校の図工・美術主任の先生方と、アートプロジェクトとは何かについて伝え、本研究の方向性を共有した。アートプロジェクトに関する印象的な文章、特に八街ミュージアムの見直しのために必要と思われる文章を本から抜粋し、以下のようにまとめた。

以下、2018年10月8日、市内小中学校12校の図工・美術主任宛てのFax

八街ミュージアムは、これまでの「商店街に作品を展示する展覧会」から次の段階「地域と学校が共につくる“アートプロジェクト”」に向かいます。“アートプロジェクト”という言葉を知らない方も多いかと思いますので、玉造が本などから印象的な言葉を拾いましたので、お読み下さい。

アートプロジェクトとは
- 美術館やギャラリーの「外部」で開催されるアート活動。
- 作品展示にとどまらず、そのプロセスや様々な人々との関わりを重視する。
- 同時代の社会のなかに入り込んで、そこに存在する個々の状況に関与しながら、その状況に何らかの変容をもたらそうと試みる表現活動。
- 日々のつながりの中から偶発的に様々な活動が生まれることを重視する。
- ある特定の人だけが持つ「才能」ではなく、誰もが必ず持っている「創造性」（creativity）を重要視する。参加者すべてのなかに存在する創造性が、何らかの方法で、本人がこれまで経験したことのないような形で発露し、そしてそれらが集まると、一人でつくるものよりも大きなものに発展する可能性がある。

出典：「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年」アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

展示の際、お店の方とたくさん会話などして、共に八街ミュージアムを創り上げてください。

上の文を元に、本研究における〈アートプロジェクトの視点〉を、以下のように整理した。

〈アートプロジェクトの視点〉

視点－1：美術館やギャラリーなど既存の展示スペースの外に活動を広げているか
視点－2：作品展示にとどまらず、プロセスや様々な人との関わりを重視しているか
視点－3：街や学校や美術教育に、何かしらの変容をもたらしているか
視点－4：偶発的に様々な活動が生まれることを重視しているか
視点－5：特定の人が持つ才能ではなく、誰もが必ず持っている創造性を重視し、引き出しているか
視点－6：関わる双方に利があるか（Win－Winの関係／生徒・学校・商店街・市民・アーティスト…）

資料：P１１～　Episode４ History②2015～2019アートプロジェクト　参照

（2）実践

2018 年以降、アートプロジェクトとしての可能性を意識した形で、八街ミュージアムは開催されていく。**※●は玉造の企画、【　】は玉造以外の企画である。多くの人が主体的に関わったことがわかる。**

A・八街ミュージアムの変化（時系列・縦）

2017 年以前　八街駅プロジェクト（写生会 2015 年～、ＴＨＥ八街駅展 2016 年～）●
2018 年 2 月　シャッター画プロジェクト（10 年ぶり、通算 7 枚目～）**【八街駅南口商店街が依頼】**
2018 年 8 月　お絵かき傘プロジェクト（夏祭りに市内中学生のアート傘）**【八街駅南口商店街が依頼】**
2018 年 9 月　ホームページ開設●
2018 年 10 月　第 10 回八街ミュージアム（12 校約 300 作品展示）※ Web 鑑賞も可能
　西エリア（自宅手創りぎゃらりーまかろん）※八街駅南口商店街以外で初の展示場所●
　特設ギャラリープロジェクト（倉庫を期間限定ギャラリーに改装）●
　街を包む“布”プロジェクト（市内中学校行事の横断幕で街を彩る）●
　特製シール配付（スタンプラリーの商品）**【八街東小、森川先生の案】**
2018 年 12 月　ギャラリー拓道プロジェクト（年間を通したギャラリーの運営）**【協力店舗の案】**
2019 年 1 月　Twitter 開設●
2019 年 4 月　「八街ミュージアム・アートなもの達紹介特設サイト」開設**【市民】**
2019 年 10 月　八街ミュージアム展ＣＭ（12 校に配布）**【八街東小、森川先生の発案・制作】**
2019 年 10 月　第 11 回八街ミュージアム展（市内各所に 12 校約 400 作品展示）※ Web 鑑賞も可能
　演劇祭の開催**【八街市教育委員会・演劇部顧問会の企画】**
　　※オープニングセレモニーとして 10 月開催予定だったが、台風により 12 月に延期
　北エリア（八街北中学校区の協力店舗）開拓**【朝陽小・松本先生、八街北中、畠山先生)】**
　東エリア（中央公民館）市民文化祭と連携**【八街市の文化芸術振興を考える会の案】**
　東エリア（中央公民館）美術部展の開催**【八街市の文化芸術振興を考える会の案】**
　南エリア（小谷流の里ドギーズアイランド）**【八街市教育委員会の紹介】**
　シャッター画プロジェクト（市民参加型「最後の本屋さん」）●
　美術教師やアーティストによる 3 つの個展の開催
　　・玉造明男個展（会場：自宅手創りぎゃらりーまかろん）**【ぎゃらりーまかろんの案】**
　　・佐藤誠一郎展（会場：八街駅市民ギャラリー）●
　　・バルサミコヤス個展（会場：Nats Up ？）**【Nats Up?の企画】**
　開催中の八街ミュージアム展を利用した鑑賞授業（八街中学校 2 年生）を実施●
2019 年 11 月クロージングトークイベントの開催（会場：Nats Up ？）**【Nats Up?の企画】**
　八街愛賞（八街愛にあふれる作品や企画に対し賞状を授与）**【八街東小、森川先生の案】**
2020 年 1 月　ストリートピアノプロジェクト（八街中美術部制作）**【市内音楽団体が依頼】**
2020 年 4 月　八街駅プロジェクト（動画配信授業「八街駅」全 5 回を八街中 HP より配信）●
2020 年 10 月　YACHIMATA 漫画化プロジェクト（街の魅力を可視化、新人賞応募、画材支援）●
2021 年 10 月　第 12 回八街ミュージアム展（市内に 8 校約 200 作品展示）※ Web 鑑賞も推奨
2021 年 1 月　ストリートピアノを八街駅南口商店街に 3 ヶ月設置**【市内音楽団体が運営】**
2021 年 4 月　ストリートピアノを大型商業施設に設置**【市内音楽団体が運営】**

第 10 回（2018 年）は、ホームページ開設、倉庫のギャラリー化、行事の横断幕を街に飾る“布”プロジェクト、市民参加型のシャッター画プロジェクト（市民参加型）、スタンプラリー参加者に特製シール配付など。翌年、第 11 回（2019 年）は、展示場所を市内全域への拡大、オープニングセレモニーとして演劇祭との連携、美術教師やアーティストによる個展の開催、八街ミュージアム展を利用した鑑賞授業の実施、市民文化祭との連携、クロージングトークイベントの開催など。さらにコロナ禍における第 12 回（2020 年）は、ストリートピアノプロジェクトや、街の魅力を可視化する「ＹＡＣＨＩＭＡＴＡ漫画化プロジェクト」の立ち上げ、街での作品展示と Web 展覧会の両立など、展示の規模は縮小しながらも、アートと街の連携を模索しながら、着実に前進を続けている。

B・八街ミュージアムの変化（時系列・横）

■作品展示中心 **～第9回2017年**(H29)	■アートプロジェクトの視点で見直す **第10回2018年**(H30)	**第11回2019年**(R1)	■コロナ禍の規模縮小 **第12回2020年**(R2)

運営関係の変化

主催：印旛地区教育研究会　第四部会図工・美術研究部			
協力：八街駅南口商店街振興組合／八街市中学校美術部顧問会			
		協力：小谷流の里ドギーズアイランド **協力**：八街市の文化芸術振興を考える会	
	後援：八街市教育委員会	**後援**：八街市教育委員会（八街教育創生『MOTE』）	

展示関係の変化

展示（南口商店街）	**展示**（南口商店街） ※1　倉庫を展示スペースにし市内アーティストと合同展示 ※2　市内書家による看板	**展示**（南口商店街エリア） ※3　アーティスト「バルサミコヤス個展」と併催、千葉テレビの取材あり	**展示**（南口商店街）
	展示（西エリア）まかろん	**展示**（西エリア）まかろん ※4　教員「玉造明男個展」と併催（本展ポスター原画等）	
		展示（東エリア）公民館他 ・美術部展開催 ※5　八街市の文化芸術振興を考える会と連携 ※6　市民文化祭等と連携	
		展示（南エリア）小谷流の里ドギーズアイランド	
		展示（北エリア）	
展示（商工会議所）		**展示**（商工会議所）「ギャラリー拓道」として通年で運営	
展示（市民ギャラリー）美術部展		**展示**（市民ギャラリー） ※7　教員「佐藤誠一郎個展」（小学校社会科資料集の原画等）	**展示**（市民ギャラリー）美術部展

鑑賞関係の変化

マップ（白黒）	**マップ**（カラー）	**マップ**（カラー）を全小中学生に配布	
スタンプラリー			感想のみ記入
	特製シールプレゼント		
		賞状（八街愛賞、など）	
		CM（DVD）	
		鑑賞授業（八街中2年3時間展開）	

その他

	HP、Twitter開設、**八街市教育センター**とリンク		
	布プロジェクト（市内中学校、通年）		
	シャッター画プロジェクト（八街中学校美術部、市民参加型）		
	アーティスト連携※1※2	**アーティスト連携**※3～※7	
		クロージングトークイベント Facebook にてライブ配信	
		お絵描き傘プロジェクト（商店街夏祭り企画）	
		演劇祭と連携（12 月に延期）	
		ストリートピアノプロジェクト（市民団体企画、美術部ペイント）	
			YACHIMATA漫画化プロジェクト （新人賞応募・画材支援）

資料：P11～　Episode4 History②2015～2019アートプロジェクト　参照
　　P25～　Episode7 History③2020～新生活様式期　参照

6　研究内容【仮説２「**美術教育を学校内に閉じず、授業にアートプロジェクトの視点を取り入れることで、《表現（制作）》《発表（展示）》《鑑賞》が学校を含む街全体で循環する、より質の高い学びが実現できるだろう。**」について】

八街ミュージアムは、図工室や美術室で日々生み出されている多くの作品に《発表》の場を与えたいという先生や街の人々の想いからスタートした。コンクールなど既存の《発表》の場だけに頼るのではなく、それまで無かった《発表》の場を生み出していく主体的な《発表》の形である。《発表》の時期や場所、規模や内容も自由に変化させることができる。独自のホームページ（2018 年より）を運営することで、Web 上での学習にも柔軟に対応でき、今後、様々な広がりも期待できる。

以下の①から③は、八街東小学校、八街中学校で行った、八街ミュージアムに関連した授業である。《表現》と《鑑賞》に、３つ目の重要な要素《発表》を加え、この《表現》《発表》《鑑賞》を学校を含む街全体で循環させる。また、八街ミュージアムに関連した授業を講師を招く校内授業研修会で行うことや、研究会で発表することを積極的に行うことで、多くの先生によって検証され、改善することができる。

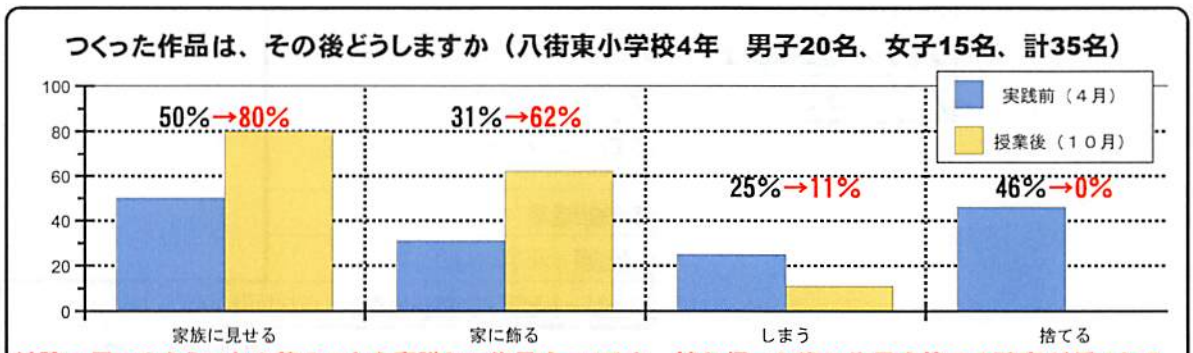
・《表現》《発表》《鑑賞》の３つを相互に関連付けながら、学習計画の中に配列していく。
・研究発表会や授業研修会を積極的に活用することでＰＤＣＡサイクルを確立し、より質の高い学びを実現する。
・街全体が美術館であるという考えのもと、今まで主に学校内で行われてきた教育活動を街や人を巻き込んで展開する。

①《発表》を前提として作品を制作する　・八街市立八街東小学校４年「未来のピーちゃんナッちゃん」

2019.11.29　第 70 回千葉県教育研究会造形教育研究大会【部会 D】提案資料
「地域とのつながりを実感し表現する児童の育成～作品を通してつながるわたしとみんな～」（小４）
八街市立八街東小学校　森川　琢也

学校での図画工作の授業は、作品自体をつくることが学習の目的になっている場合が多く、作品づくりを終えた後、誰かに作品を見せたり、どこかに飾ったりするといった考えを持つ児童は多くない。そこで各題材において、自分の作品をどこに飾り、誰に見てもらうのかという相手意識を明確にもたせて学習に取り組ませるようにした。　児童が作品を通して様々な人との結びつきを感じ取ることができるように、作品を見てもらう対象と飾る場所は、題材ごとに変えていく。対象は「家族」「学級の友達」「学年や全校の友達」「先生方」「地域の方」など自分たちの住む八街市に関わる様々な人、場所は「家庭」「教室」「校内多目的ホール」「八街図書館」「八街商店街」とし、多くのつながりを生み出すことができるように設定した。また作品を見てもらう際には、感じたことを感想カードに記入してもらうようにした。

相手意識を持ち学習に取り組んだことで、これまで以上に丁寧につくったり、アイデアをいっそう練りながら上手につくりたいという気持ちを持ったりして作品づくりに取り組む児童が増えた。作品を見た人の気持ちを知ることで、地域の方が自分たちと関り合い、応援してくれることや、関心を持ち見守ってくれていることに気づくことができ、自分が市内の多くの人と結びついていることを実感することができた。作品を見た相手から感想をもらうことで生まれた「もっと見てほしい」「ほめてほしい」などといった気持ちは、次の作品づくりの意欲につながった。



結論：見てもらうことや飾ることを意識して作品をつくると、持ち帰った後に作品を捨てる確率が低くなる

②《表現》《発表》《鑑賞》を連動させる　・八街市立八街中学校１～３年「八街駅展プロジェクト」

「写生会　ー八街駅を魅力的に描こうー」（八街中学校1年、14時間）／「THE八街駅展」

ＪＲ八街駅は八街市の「八」と、八街市の特産品である落花生をモチーフとした美しいデザインの駅舎である。2015 年始まった八街中学校１年生約 200 人による八街駅での写生会「八街駅を魅力的に描く」は、新入生が美術科で最初に取り組む長期題材である。自分の住む街の象徴的な建物「八街駅」のデザイン性の高さについて知り、その魅力を表現すると共に、《表現》《発表》《鑑賞》の循環について意識させる題材である。

・八街中学校で制作する作品は、基本的に《発表》を前提としていること、《鑑賞》者がいることを伝え、意識させる。
・授業の導入で、「THE 八街駅展」の様子を映像で見せ、完成後の作品の一部が駅のギャラリーで《発表》されることを伝える。
・先輩の作品が自分たちの制作につながり、自分たちの作品も後輩の制作につながることを知り、《表現》《発表》《鑑賞》の循環を意識する。
・《表現》の途中に、目の前の《鑑賞》者に作品をみせながら制作意図を言葉で伝える、学級内《発表》を全員が行う。
・作品完成後に作品解説文（展示のキャプションに使用）を書き、自分の《表現》を《鑑賞》者に、文章で伝える。
・街で《発表》（展示）が行われている時期は、授業と関連付けながら積極的に《鑑賞》を促し、他者の《表現》に関心を高く持たせる。

「動画配信授業・八街駅」（八街中学校全学年、全5回）

2020 年、臨時休業中、本校では３年生の先生方を中心に、多くの先生が授業動画（3 ヶ月間で約 180 本）を作成し、八街中学校 HP から配信した。授業動画の作成は、生徒に何かを伝えるという、対面式の授業で、当たり前のように行っていたことを見直す、よい機会になった。何かを伝えるための「適切な画像」や「適切な言葉」を、これほど真剣に考えたことはなかったことにも気づかされた。

美術科の動画配信授業の題材を考える中で、生徒に一番伝えたいことは何かを考えた。そして、４月から５月にかけて、全学年（３年生は必修課題、1，2 年生は自由課題）に向けた動画配信授業「八ｔ街駅（全５回）」を作成した。前半（第１回～第 3 回）は身のまわりのデザインについて考える内容。後半（第４回・第５回）は街に出て絵を描くことや、街に作品を展示することを通して、社会における美術の役割を考える内容である。

第１回「日本の美しくデザインされた駅たち」　2020 年４月 23 日（木）４分 41 秒
　日本各地のデザイン性の高い駅を紹介。なぜ、デザインにこだわった駅は存在するのかを問う。
第２回「八街駅のデザインを考える（１）もの」　2020 年４月 30 日（木）４分４秒
　八街駅や交番の屋根が、落花生の形からデザインされているなど、身近デザインに興味を持つ。
第３回「八街駅のデザインを考える（２）文字」　2020 年５月 13 日（水）８分
　八街駅の屋根や、ロータリーの時計の台が、漢字の「八」からデザインされていることを知る。身のまわりにあふれている様々な文字に興味を持つ。
第４回「八街駅を描く（１）八街駅で八街駅を描く」　2020 年５月 20 日（水）５分 44 秒
　見慣れているはずの八街駅。しかし実際に絵を描くことで、初めて気付くことも多い。自分と異なる視点で八街駅をみている仲間の存在にも気付く。写生会を行うことの意味を考える。
第５回「八街駅を描く（２）絵に込めた思い」　2020 年５月 27 日（水）５分 41 秒＋実技
「ＴＨＥ八街駅展」の展示作品の中から、５つの八街駅を鑑賞する。同じ日に、同じ八街駅を見ているのに、様々な八街駅が完成するのはなぜか。表現の違いを楽しみ、興味を持つ。

③八街ミュージアムを使った鑑賞授業　　・八街市立八街中学校２年「八街ミュージアム展の鑑賞」

「美術を通して社会にどう貢献できるかー八街ミュージアム展の鑑賞ー」（八街中学校2年、3時間）

３学期の授業で制作した作品は、《発表》の場がほとんどない。八街中学校では2019年より、２年生が前年度３学期に制作した「寄せ木彫刻」を八街ミュージアム展に展示している。本題材では、自分や級友が１年前に《表現》した作品が《発表》されている八街ミュージアム展に足を運び、作品の《鑑賞》や街の人々との対話を通して、美術と社会の関わりを考える。

１時間目
・八街ミュージアムＨＰを使い、八街ミュージアム展の経緯や、現在の展示の様子を知る。
・展示作品や展示の様子を画像で確認しながら、商店街での作品鑑賞と質問の計画を立てる。
２時間目
・商店街での作品鑑賞とお店の方へのインタビューを行う。
３時間目
・商店街での体験と、インタビュー内容を元に、自分たちがつくった作品が、街や人にどのような影響を与えているのかを話し合い、「美術を通して社会にどう貢献できるか」を考える。

資料：Ｐ１６～　Episode５ 授業～《表現》《発表》《鑑賞》を循環させる～　参照

７　成果と課題

【成果】
・様々な地域で実践されているアートプロジェクトは学校や美術が街と関わる際の参考となり、八街ミュージアムにアートプロジェクトの視点を取り入れたことで、美術を軸とした地域連携は、これまでにない広がりを見せた。今後、美術が地域と学校を繋ぐ重要な役割を担い、美術が地域連携に長けた教科であることを目に見える形で証明し続けていけば、学校教育における美術科の存在意義は確固たるものになると感じる。
・アートプロジェクトの視点は、新学習指導要領における授業改善の視点「主体的・対話的で深い学び」と共通することも多く、授業改善にも大いに役立った。《表現》《発表》《鑑賞》を学校を含む街全体で循環させることを意識したことで、既存の題材も、より学び多い題材になったように感じる。
・アートプロジェクトの視点を取り入れた八街ミュージアムの見直しを、コロナ禍前（2018 年～ 2019 年）に行え、数々の新たなチャレンジが行え、今後の方向性が見えたことの意味は大きい。制限の多い現状でも、2019 年までの経験を元に、八街ミュージアムの様々な可能性を模索することができている。
・アートプロジェクトの視点を取り入れたことで、今まで以上に人とのつながりを大切にするようになり、様々な広がりを期待するようになった。これにより、多くの先生方、商店街の方、街の方が主体的に関わり、積極的にアイデアを出し、関わってくれた。
・八街ミュージアムで街の人と関わる中で、「この街をもっと良くしたい」「街全体で子どもたちをよりよく育てていきたい」と考える、多くの魅力的な人と出会うことができた。こうした魅力的な人と中学生が出会う機会をつくりたいという思いが高まり、コロナ禍直前、2020 年１月の社会人講話（２学年１５５人参加）に７人の方を呼ぶことができ、美術教育以外での連携の可能性も広がった。

【課題】
・コロナ禍において、これまでのような地域連携の形は難しい部分も多い。コロナ禍で、全国の様々なアートプロジェクトも中止になり、情報も少ないが、今後も全国の動向を注視し、八街ミュージアムの可能性を模索していきたい。
・様々な地域で実践されている既存のアートプロジェクトが小・中学校の美術教育に注目するような仕掛けも必要に感じる。美術教育と、社会における美術が地続きになる連携の形を模索していく。
・八街ミュージアムは様々に広がったが、複雑にしすぎると引き継ぎ等が大変になる。基本的な部分についてはシンプルにしておくことで、自由度が増し、継続、発展につながるように感じる。